

『とはずがたり』における動詞「たづぬ」の意味・用法

いしだ ひろこ
石田 裕子

同志社大学日本語・日本文化教育センター 嘱託講師

hiroko14d@yahoo.co.jp

キーワード

『とはずがたり』, たづぬ, たずねる, 多義語, 意味・用法

要旨

本稿では『とはずがたり』における動詞「たづぬ」全 32 例の意味・用法を記述し、意味ごとの用例数を示した。32 例は全て「ある事物・事態を求めて、それが存在するであろう場所へ進んでいく」という動作性を持った具体的用法で、形式的用法と慣用的な用法はなかった。さらに「たづぬ」の対象、対象についての動作主体の認識、対象の所在の把握具合などに注目し、「探し求める」15 例、「探求する」1 例、「訪れる」8 例、「質問する」8 例の 4 つに分類した。

1. はじめに

1. 1. 動詞「たずねる」「たづぬ」の意味の広がり

動詞「たずねる」の意味は、大きく分けて 3 つある。1 つは「知人をたずねる」「京都をたずねる」のような「訪問する」という意味、1 つは「警察官に道をたずねる」「友人に仕事を辞めた理由をたずねる」のような「問う・質問する」という意味、1 つは「たずね人」「いなくなった猫の行方をたずねまわる」のような「探し求める」という意味である。「訪問する」の意味では「訪ねる」、「問う・質問する」「探し求める」の意味では「尋ねる」と表記され、漢字を使い分けて意味の違いを示している。これら 3 つの意味は、一見すると関連が見出しにくく思われるが、『古語大辞典』（1983 年、小学館）の「たづぬ」の「語誌」には、意味の広がりについて、次のように記されている。

起源的には「たどる」に意味の共通する所があり、「たづたづし」「たどる」と同根であると認められる。はっきりしない道をたどり求めて行く意から発して、「さがす」「さぐる」「もとむ」などの意に広がり、さらに「問ふ」「とぶらふ」とも意味的に接近する場合が生じた。

また、『古典基礎語辞典』（2011 年、角川学芸出版）の「たづぬ」の「解説」には、

目指す人や物が、ある道筋の先にいるだろう、あるだろうと思って、その道筋を手がかりに先のほうへ、先のほうへと進んで行くのが原義。そこから、人間関係や先例などを血脈や故実をさかのぼって明らかにする、事情を知る人に不明な点を質す、という意味に展開した。

とある。また、小林（2009）は古代語における「聞く」及び「尋ぬ」の用法について中古和文を

調査し、「尋ぬ」の「<質問>の意味は本来的なものではなく、次第に発達してきたもの (p. 1)」であると見られ、「全体的な流れとしては複合動詞の場合を中心として「尋ヌ」が<質問>の意味への拡張を始めつつある (p. 12)」と述べている。

1. 2. 本稿の目的

このように、古くから多義的に用いられている動詞「たづぬ」は『とはずがたり』ではどのような意味で用いられているか。本稿では、『とはずがたり』における動詞「たづぬ」の意味・用法を記述する。そして、意味ごとの用例数を示す。

2. 先行研究

『とはずがたり』の動詞「たづぬ」については磯部 (2012) がある。これは、中世における動詞「きく」の意味・用法のうち、「質問する」という意味での用法について明らかにするために、『とはずがたり』における動詞「きく」の用例を調査・分析したものである。この中で、「きく」との比較のために、同じ「質問する」の意味を持つと考えられる「たづぬ」33 例についても調査している。その結果、「質問する」の意味で使用されているのは、動詞「たづぬ」では8例、「御たづね (あり)」の形で尊敬語として使用されているものでは8例あった。そして、これら16例の特徴を使用場面と動作主体という点から明らかにし^{註1}、『とはずがたり』において「「訊く。質問する」の意として主用されていると考えられる動詞は「たづぬ」 (p. 28)」であり、「「たづぬ」の動作主体は作者以外の場合が (中略) 圧倒的に多く、一方、作者自身が質問されている対象となっている用例が目立つ (p. 29)」と指摘している。

上述のように、磯部 (2012) が『とはずがたり』の中の「たづぬ」の用例を調査したのは、「質問する」の意味での「きく」の用例と比較・検討するためであった。そのため、それ以外の意味で用いられている「たづぬ」については、8例が「おとずれる。訪問する」であると指摘するのみで詳しい考察はない。また、残る17例については触れられていない。本稿では、動詞「たづぬ」の意味・用法の記述、分類を行うという目的から、「質問する」という意味以外の動詞「たづぬ」についても分類する。

3. 調査の概要

『とはずがたり』における動詞「たづぬ」の全用例を対象とする。「たづぬ」は漢字表記の場合、「訪ぬ」「尋ぬ」などがあるが、本調査ではそれらを区別せず全て抜き出す。複合動詞については、「たづねいく」「たづね来」「たづねきく」のように動詞「たづぬ」の連用形に動詞が下接した複合動詞は対象としないが、「たづねたまふ」「たづねまうす」のように動詞「たづぬ」の連用形に尊敬・謙譲を表す補助動詞を下接したものは対象とする。また、「御たづね (あり)」という表現については、「たづね」が動詞「たづぬ」の連用形転成名詞であることから、本稿では対象としない。

『とはずがたり』の本文は、久保田淳校注・訳 (1999) 『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』 (小学館、以下『新編』とする) による。

用例を挙げる際は、() 内に用例番号を付し、『新編』の本文にある用例を記す。そして、その後ろに(巻数 頁数-行数)の順で掲出箇所を示す。例えば、(I 197-12)は巻一 197 頁 12 行目にその用例があるということである。

4. 動詞「たづぬ」の意味・用法

動詞「たづぬ」の用例は全部で 32 あった。『とはずがたり』における動詞「とる」の意味・用法を調査した石田(2015)では、分類を具体的用法、形式的用法、慣用的な表現^{注2}の3つに大きく分けた。本稿でも同様に分類すると、32 例すべてが「ある事物・事態を求めて、それが存在するであろう場所へ進んでいく」という動作性を持った具体的用法であり、形式的用法と慣用的表現は見られなかった。

32 例は、「たづぬ」の対象は何か、動作主体が対象をどの程度明確に認識しているか、対象の所在をどの程度把握しているかなどの点から細かく分類することができた。その結果、「探し求める」「探求する」「訪れる」「質問する」の4つの意味に分けられた。意味ごとの用例数は次のとおりである。

探し求める	15 例
探求する	1 例
訪れる	8 例
質問する	8 例

以下、意味ごとに詳しく見ていく。

4. 1. 探し求める

何を「たづぬ」べきか、対象は明確なのだが、それが手元になく、それがどこにあるのかはつきりわからない中で、探す・求めるという場合に用いられたもので、15 例あった。「たづぬ」の対象はいずれも具体物で、(1)～(8)の8例は人、(9)～(13)の5例は物、(14)は動物、(15)は場所であった。対象を探し求めた場所・範囲は、(3)「あちこち」、(4)「あなたこなた」、(5)「山々寺々までも、思ひ残す隈なく」、(6)「あちこち」、(8)「三笠の山」、(9)「唐土」、(10)「そのわたり」、(14)「在庁が中」のように文中に記されているものが8例で、それらは漠然とした範囲、広範囲にわたる場所であることがわかる。

- (1) 人知れぬ御物語、さ夜更くるまでになりぬるに、うち騒ぎたる人音して尋ぬ。「誰ならむ」と言ふに、河崎より、「今と見ゆる」とて、告げたるなりけり。(I 222-14)
- (2) さても、有明の月の御もとより、思ひがけぬ伺候の稚児のゆかりを尋ねて、御文あり。(II 307-15)
- (3) さるほどに、あちこち尋ねらるれども、いづくよりか、ありと申すべき。(II 323-07)
- (4) 如法、御所よりも、あなたこなたを尋ねられ、(II 324-12)
- (5) 雪の曙も、山々寺々までも、思ひ残す隈なく、尋ねらるるよし聞けども、つゆも動かれず、隠れ居て、(II 324-13)
- (6) さても、いづくにもおはしませずとて、あちこち尋ね申されしをりふし、(II 327-12)

- (7) 「…いかなる者に契りを結びて、憂き世を厭ふ友としけるぞ。一人尋ねては、さりと
もいかがあらむ。…」 (IV477-05)
- (8) 「…涙川袖にありと知り、菊の籬を三笠の山に尋ね、長月の空を御裳濯川に頼めける
も、皆これ、ただかりそめの言の葉にあらじ。…」 (IV477-06)
- (9) 「かしこく今宵参りてけり。御渡りの折は、唐土までも白き色を尋ねはべらむ」とて
うち笑はれぬるぞ、忘れがたきや。(I 243-07)
- (10) 「鼓打ちを用意せず」と申す。そのわたりにて鼓を尋ねて、善勝寺これを打つ。
(II 341-14)
- (11) をりふし、東の方へよすが定めて行く人、かかる物を尋ぬて、三宝の御あはれみに
や、思ふほどよりもいと多くに人取らむと言ふ。(V 513-11)
- (12) 憂しと思ふ心に似たるねやあると尋ぬるほどに濡るる袖かな (III 361-10)
- (13) 雲居を渡る雁の涙も、物思ふ宿の萩の上葉を尋ねけるかと誤たれ、明かし暮して年の
末にもなれば、(III 402-06)
- (14) 萱津の宿といふ所にて、にはかにこの馬死ににけり。驚きて、在庁が中より馬は尋ね
て参らせたりけると聞きしも、(IV 427-15)
- (15) 船の内なりし女房、書き付けて賜びたりし所を尋ぬるに、ほど近く尋ね会ひたり。
(V 494-01)

(8) は後深草院が作者に対して発した言葉の一部で、(7) の直後に続く部分である。「菊の籬を三笠の山に尋ね」は、言葉通り訳せば「菊の籬は三笠山にないかと探し求め」となり、「たづぬ」の対象は物ということになる。しかし、後深草院の発言内容を考慮すると、そうとは考えにくい。この場面は、後深草院に取りすがりたい気持ちを抑えてさりげない態度を取る作者に対し、後深草院が「いかなる者に契りを結びて、憂き世を厭ふ友としけるぞ」と言って、契りを結んだ男性が多くいるのであろうと疑っている場面である。『新編』の注釈には、「涙川袖にありと知り」は作者が鎌倉を出発する際に平資宗が贈った歌を、「菊の籬を三笠の山に尋ね」は春日の中臣祐家の家の庭の菊を見て作者が詠んだ歌を、「長月の空を御裳濯川に頼めける」は伊勢の荒木田尚良と交わした歌を指すとある^{注3}。このことから、後深草院は「菊の籬を三笠の山に尋ね」を単に「菊の籬を三笠山に探し求める」という意味ではなく、中臣祐家の子・中臣祐永を探し求めるという意味で用いていると判断した。

4. 2. 探究する

「たづぬ」の対象が学問的・哲学的な内容であるもので、1例あった。広義には4. 1. の「探し求める」に含まれると思われるが、対象が抽象的なものである点が異なる。

- (16) 法文の御談義ども果てて、九献ちと参る。御陪膳にさぶらふに、「さても、広く尋ね、深く学するにつきては、男女のことこそ罪なきことにはべれ。…」 (III 363-16)

4. 3. 訪れる

「たづぬ」の対象をはっきりと認識し、対象の所在も明確に把握、あるいはおおむね見当が付いており、そこに足を運ぶという場合に用いられたもので、8例あった。「たづぬ」の対象は、

(17)～(21)の5例が場所、(22)～(24)の3例が人であった。訪れる場所については、(17)～(21)は「局」「備後国和知」「入道殿」「煙となりし跡」「都の御所」と具体的に書かれている。また、対象が人である(22)～(24)も、つまりは対象となっている人の居る場所を訪れるという意味である。4. 1. の「探し求める」で挙げた用例のように、広範囲な場所や漠然とした範囲を表す表現はない。

(17) 聞かせおはしはして、「ことわりや、あが子が立ちけること、そのいはれあり」とて、局を尋ねらるるに、「これを参らせて、はや都へ出でぬ。さだめて召しあらば参らせよとて、消息こをさぶらへ」と申しけるほどに、(Ⅱ322-11)

(18) 「我は備後国和知といふ所の者にてはべる。宿願によりて、これへ参りてさぶらひつる。住まひも御覧ぜよかし」などさそへども、「土佐の足摺の岬と申す所がゆかしくてはべる時に、それへ参るなり。帰さに尋ね申さむ」と契りぬ。(Ⅴ489-06)

(19) 十五夜、二条京極より参りて、入道殿を尋ね申して、夢やうに見まゐらす。(Ⅴ504-11)

(20) 神楽岡といふ所にて煙となりし跡を尋ねてまかりたりしかば、旧苔露深く、道を埋みたる木の葉が下を分け過ぎたれば、石の卒塔婆、形見がほに残りたるもいと悲しきに、(Ⅴ516-01)

(21) 暮るるほどに桜の枝を折りて、兵衛佐のもとへ、「この花散らさむ先に、都の御所へ尋ね申すべし」と申して、(Ⅴ528-01)

(22) 十五日の夕つ方、「河崎より迎へに」とて、人訪ぬ。(Ⅰ197-12)

(23) 「いかなるけしからず、情けなさぞ。誰にてもおはしますべき御心ざしにてこそ、ふりはへ訪ねたまふらめ。山おろしの風の寒きに、何事ぞ」(Ⅰ248-12)

(24) 尋ぬべき人もなごさに生ひ初めし松はいかなる契りなるらむ(Ⅲ398-09)

(24) は、作者が出産した「有明の月」の遺児を思つて詠んだ歌で、「生ひ初めし松」は「有明の月」の遺児を指す。父親である「有明の月」が亡くなったあとに作者が秘かに出産した子であるため、「この子を訪れる人がいない」と言っているのである。

4. 4. 質問する

「たづぬ」の対象のことを動作主体がよく知らないため、知っている人や詳しい人に聞いて知ろうとする場合に用いられており、8例あった。このうち(25)～(30)の6例は、疑問詞^{註4}を伴った質問の文が先行し、すぐあとに質問に対する答えが書かれている。

(25) 「御尋ねの白物は、何にかはべる」と尋ねらる。霜・雪・霰とやさばむとも、まことしく思ふべきならねば、ありのままに、「…(中略)…」と答ふ。(Ⅰ243-03)

(26) 女院の御方より、「ただ今の御盃はいづくにさぶらふぞ」と尋ね申されたるに、新院の御前にさぶらふよし申されれば、(Ⅲ375-10)

(27) 「何事ならむ」と尋ね申せば、「その身をこれにて、『…(中略)…』と、かへすかへす申されたり」とて笑はせたまふもむつかしければ、四条大宮なる乳母がもとへ出でぬ。(Ⅲ380-10)

(28) 泣き濡らしたる袖の色もよそにしるかりけるにや、「いかなることぞ」など尋ねらるるも、「問ふにつらさ」とかやおぼえて、物も言われねば、(Ⅲ399-15)

(29) 「涙川と申す川はいづくにはべるぞ」といふことを先の度尋ね申ししかども、知らぬよし申してはべりしを、(Ⅳ451-13)

(30) 館の辺にたたずみたるに、男二、三人、官人とおぼしくて、出で来て、「いづくよりぞ」と尋ぬ。「都の方より結縁しに参りたる」と言へば、(Ⅳ465-10)

また、疑問詞は使われていないが、不明なこと・心配なことについて、詳しいであろう人に「たづぬ」という用例が2つあった。これも、質問に対する答えが直後に示されている。

(31) 「この春のころよりわづらひつるが、なのめならず大事なるを、道の者どもに尋ぬなれば、『御心にかかりたるゆゑ』など申す。…」(Ⅱ334-03)

(32) 胆をのみつぶすもあぢきなくて、備後国といふ所を尋ぬるに、ここに留まりたる岸よりほど近く聞けば、下りぬ。(Ⅴ493-15)

(32) を、磯部(2012)は「質問する」の意味に分類しつつも、「「備後国という所をさがしていたところ」のように、「探し求める」の意でも解釈可能のようにも思われる(p.25)」としている。確かに、4. 1. の「探し求める」で述べたように、何・どこを「たづぬ」べきかは明確だがその所在がわからないと考えると、(32)は「探し求める」の意味であるように思われる。しかし、「備後国といふ所」という表現からは、動作主体(この場合は作者)が「備後国」を未知のよく知らない所として捉えていることがわかる。「～という～」という表現にはいくつか用法があるが、「備後国といふ所」は名前を示す用法である。これは、「「名詞1+という+名詞2」という形をとって、名詞1で、名詞2の「名前」を示し(中略)名詞1について話し手が聞き手が知らない(または、話し手が聞き手が知らないと思っている)場合、または、話し手・聞き手の両方が知らない場合(市川 2005:323)」に用いられるものである。(32)は地の文での用例であるので、「備後国」を知らない場所として捉えているのは作者である。また、「尋ぬるに」の直後に「ここに留まりたる岸よりほど近く」と答えにあたる内容が記されている。これは(25)～(31)に見られた特徴と一致する。これらのことから、(32)は「備後国という所はどこか質問したところ」という、「質問する」の意味であると判断した。

6. おわりに

本稿では、『とはずがたり』における動詞「たづぬ」全32例の意味・用法を記述し、意味ごとの用例数を示した。32例はいずれも具体的用法で、形式的用法と慣用的な表現は見られなかった。これを、「たづぬ」の対象、対象についての動作主体の認識、対象の所在の把握具合などに注目して分類した結果、「探し求める」「探求する」「訪れる」「質問する」の4つの意味に分類することができた。以下に意味・用法ごとの用例数をまとめる。

具体的用法 32例
探し求める 15例
探求する 1例

訪れる	8例
質問する	8例
形式的用法	用例なし
慣用的な表現	用例なし

今回は、「たづねいく」「たづね来」「たづねきく」のような複合動詞は対象外としたが、先に述べたように、中古和文を調査した小林（2009）は「たづぬ」が複合動詞の場合を中心に「質問」の意味への拡張を始めつつあることを指摘している。鎌倉時代成立の『とはずがたり』において「たづぬ」が複合動詞となった場合にどのような様相を示すのかを調査することは、動詞「たづぬ」の意味の展開を明らかにする上で重要である。また、磯部（2012）の挙げた「御たづね（あり）」という表現の意味・用法と、動詞「たづぬ」の意味・用法の比較・検討も必要であろう。今後の課題としたい。

【注】

- 注1 磯部（2012）では、「質問する」という意味での動詞「たづぬ」および「御たづね（あり）」の使用場面を消息・地の文・会話文に分けて調査し、使用場面ごとの動作主体についても詳細に分類している。その結果、動作主体は、「質問する」の意味の動詞「たづぬ」8例のうち6例が作者以外、「質問する」の意味の「御たづね（あり）」8例はすべてが作者以外であると指摘している。
- 注2 具体的用法とは動詞本来の意味を持った動作性のある用法、形式的用法とは動作性が希薄になり形式化した用法、慣用的な表現とはある特定の語と結びついて一定の意味を表す、いわゆる連語を言う。なお、慣用的な表現を入江（2013）では連語としている。
- 注3 この部分の解釈については『新編』のほか、呉竹同文会（1966）、玉井（1971）、次田（1970）、次田（1987）、富倉（1966）、西沢・標（2000）、福田（1978）、三角（1994）、松村（1990）、岸田・西沢（1988）、松本（1975）も同様であった。
- 注4 ここでは、「いつ・どこ・誰・何・いくつ・いくら・いつこ・いつれ」などの名詞、「どう・なぜ・いかに」などの副詞、「どの・どんな・いかなる」などの連体詞、名詞「何」に「人・個・枚・台」などの接辞（いわゆる助数詞）が続いた表現、この4種の疑問を表す語句を疑問詞ということにする。

【参考文献】

- 石田裕子（2015）「『とはずがたり』における動詞「とる」の意味・用法」『同志社日本語研究』18, pp. 55-65
- 磯部佳宏（2012）「『とはずがたり』におけるどうし「聞く」の意味用法」『山口大学文学会誌』62, pp. 19-29
- 市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 入江さやか（2013）「『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法」『同志社国文学』78, pp. 145-156
- 小林賢次（2009）「「聞く」と「尋ヌ」の語史—古代語における〈質問〉の意味の成立をめぐる—」『国語と国文学』1024, pp. 1-14

【参考資料】

- 久保田淳校注・訳（1999）『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 はずがたり』小学館
- 呉竹同文会（1966）『とはずがたり全釈』風間書房
- 玉井幸助（1971）『問はず語り研究大成』明治書院
- 次田香澄（1970）『校注古典叢書 とはずがたり』明治書院
- 次田香澄（1987）『とはずがたり全訳注（下）』講談社学術文庫
- 辻村敏樹編（1992）『とはずがたり総索引 〔自立語編〕』笠間書院
- 富倉徳次郎訳（1966）『とはずがたり』筑摩書房
- 西沢正史・標宮子（2000）『中世日記紀行文学全評釈集成 第四巻 とはずがたり』勉誠出版
- 福田秀一校注（1978）『新潮日本古典文学集成 とはずがたり』新潮社
- 三角洋一校注（1994）『新日本古典文学大系50 とはずがたり たまきはる』岩波書店
- 松村雄二編校注（1990）『とはずがたり』新典社
- 岸田依子・西沢正二校注（1988）『とはずがたり』三弥井書店
- 松本寧至編（1975）『とはずがたり』桜楓社

【参考辞書】

- 大野晋編（2011）『古典基礎語辞典』角川学芸出版
- 北原保雄編（2010）『明鏡国語辞典』大修館書店
- 小泉保・船城道雄・本田皇治・仁田義雄・塚本秀樹編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 上代語辞典編集委員会（1972）『時代別国語大辞典 上代編』三省堂
- 中田祝夫・和田利政・北原保雄編（1983）『古語大辞典』小学館
- 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編（1982）『角川古語大辞典』角川書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編（2000）『日本国語大辞典第二版』小学館
- 三角洋一編（2005）『東書最新全訳古語辞典』東京書籍
- 村松明編（1988）『大辞林』三省堂
- 室町時代語辞典編集委員会編（2000）『時代別国語大辞典 室町時代語編』三省堂
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

【付記】

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究（C）課題番号 22520478「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」の助成を受けたものです。

The Meaning and Usage of the Verb '*tazunu*' in the *Towazugatari*

Hiroko ISHIDA

Keywords: Towazugatari, Tazunu, Tazuneru, Polysemous word, Meaning and usage